

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4270500640		
法人名	有限会社 めぐみ		
事業所名	グループホームめぐみ荘(めぐみ荘・めぐみ荘2共通)		
所在地	長崎県大村市西部町495-7		
自己評価作成日	平成28年2月10日	評価結果市町村受理日	平成28年6月3日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/42/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉総合評価機構
所在地	長崎県長崎市宝町5番5号HACビル内
訪問調査日	平成28年3月30日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

私達グループホームめぐみ荘は住宅街の喧騒から離れた立地にあり自然に囲まれた環境の中で、入居者の方とスタッフが“共生”の精神で認知症症状の緩和に努めております。また、入居者様の思い、ご家族の思いに配慮し、寄り添い入居者様、ご家族様に満足いただけるサービスの提供を心がけております。周辺の地域を活かしながら地域の方々や入居者様の交流が図れるように開かれたグループホームを目指しております。入居者の皆さまが笑って“今を生きる”ことを実践できるようサポートしております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は大村湾を望む、竹林に囲まれた静かな環境に位置している。理念は「1.笑顔、2.尊厳の遵守、3.自立支援、4.よりその人らしく、5.個別ケアの実践と充実、6.地域交流」である。激動の時代を生きてきた利用者の各々の人生感、歩み、個性を大切にして、利用者がその人らしく生きる為の支援を行っている。職員は1対1の場面で、利用者の若い時の話を聞き、積極的に利用者に関わりを持ち、気持ちを汲み取ろうとする姿勢を貫いている。事業所は、看護師を配している他、協力医の協力体制を確立しており、最期まで家族と共に利用者へ寄り添う看取り支援を行っている。職員は改善に向けて意識が高く、管理者は様々な改善提案を取り入れて新しい取組みを行っており、管理者・職員共に、利用者の「笑顔」を引き出す為に努力を惜しまない事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関やフロア内に掲示し意識できるようにしている。入社時に説明を行い必要な時には会議でも理念にのっとって話を行っている。スタッフは理念に基づき入居者様と接している。	理念の一つである「よりその人らしく」の実現のために、利用者各々の歩んで来た人生を大切にしながら日々、支援している。利用者が落ち着かないときは、家族から話を聞き、利用者が安心するまで関わりを持つ支援を行っている。理念を支援の根幹に据え、日々、具現化に努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	日常的には難しいが時々地域のゲートボール仲間や町内の方が来荘され、お話をしていられる。また地元の消防団に協力して頂きホームでの地域を巻き込んだ消防訓練を開催している。	町内会の人や、事業所の草刈りを行うなどの協力関係がある。地域の消防団が70名ほどで事業所を訪問した際は、元消防団員の利用者が過去を思い出し、喜んだ事例もある。子育て支援センターの乳幼児の訪問を受入れるなど、地域密着型の事業所としての役割を担っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進委員に地元の民生委員になって頂き会議の中で認知症について(現状について)話をしている。他の委員さんからの相談や質問にも応じている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	毎回、ホームでの活動や状況を報告し市の見解や民生委員、皆様の学職を活かした意見などを頂き客観的にホームのサービスの向上について考えることが出来ている。中には気がつかない指摘があり、とても役に立っている。	年6回、構成委員の参加で開催している。事業所は活動などを報告し、意見交換を行っている。議事録はその場でパソコンに入力するため詳細でわかりやすい記録である。会議のメンバーや家族の提案で始めたバザーを継続して行うなど、会議での意見をサービスの向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	大村市では福祉行政事務所が本庁と別になっておりカウンターでも相談しやすい雰囲気がある。また重要な事等は顔を合わせて相談できる。またメールやファックスを駆使して情報を提供してもらい、連携は取れていると思う。	毎月、市の担当窓口とは運営上の手続きや問い合わせを行い、担当者とは馴染みとなっている。又、市の職員も事業所を訪問している。市主催の研修を職員が受講したり、数ヶ月1度、市の介護相談員を受入れるなど協力関係の構築に努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員で勉強会を行い、基本的な考え方から学んでいる。入居者様の状況によりやむを得ず必要な時にはその都度話し合いを行い理解を深めている。	現在、身体拘束は行っていない。定期的に身体拘束について内部研修を行っている。日常の中でも繰り返し身体拘束について、職員間で話し合っている。言葉の拘束については、現場では互いに注意し合っている。玄関は日中は開錠しており、身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	マニュアル等を回覧したり職員間でもお互い意見交換をしながら自分を客観視する機会を持つようにしている。		

グループホームめぐみ荘(めぐみ荘・めぐみ荘2共通)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者が学び、報告という形で行っているが、実際の場面に該当者がいないということもあり、活用に至っていない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	締結や解約の際には都度、説明を行い時間を多めに取ってもらい理解を促している。改定の場合は改定部分を文書にて各家族へ配布し理解と協力を得るようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族と職員については気軽に話せる雰囲気、関係作りに努めている。不安や希望など会話から頂くこともある。年に1回はアンケートを配布している。	年に1回、家族に向けて独自にアンケートを実施している。その中で「気になる事」という項目を設け、「歩いているかどうか心配である。」という意見には、写真を送って対応した事例がある。年1回の忘年会やバザーには、家族を招いており、職員とのコミュニケーションを図っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者と職員とにあまり垣根がなく、意見や気持ちなど聞いたり話し合うことが出来ている。	管理者は職員の意見や要望を傾聴している。シフトは家庭事情に配慮し、職員間でフォローし合い、働き続けられる環境となっている。管理者は質の高い介護に繋がるよう勉強会や外部研修にも参加している。また、職員の提案から介護の記録が行いやすいようにファイリングの見直しを行っており、改善についての意識が高い。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	各職員の個性を把握し、言い方伝え方に考慮しながらモチベーションを向上してもらえよう努めている。給与面でも改善を図りながら向上心をもって働けるよう環境を整えている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	勉強会を実践しモチベーションを高めてもらえるように努めている。外部研修にも出来るだけ参加してもらえるよう、案内を回覧や掲示している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市内のGH協議会への参加やGHスタッフのみで行われている『各駅停車』という勉強会・交流会に参加している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居の際にはアセスメントを行う。その後も関係機関や家族から少しずつお話を聞きながら臨機応変に対応している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	導入時には確認を行うも、入居の際には家族も混乱している事が多く、時間を経て再度家族の希望などを確認するようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居の際には実情を把握し他のサービス利用についても説明を行うも、家族側として入居の強い希望がある場合はその対応を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	職員同志の会話の中で入居者の残像機能を発見している場面などを耳にすることがあり、そのような目を持っていると自負している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族としての希望を出来るだけ尊重したケアが出来るように心掛けている。また面会時には本人の出来ることなどを伝えるよう心掛けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ゲートボール仲間や老人会の仲間等尋ねてこられるとゆっくりお話しできるよう配慮している。行きつけの美容院や地域のお店にお連れしたりしている。	家族の他、友人が訪ねて来ることが多い。誕生日に、家族が自宅でお祝いの会を開く際に、帰宅する利用者もいる。訪問した家族の写真を居室のボードに日付を入れて貼る支援を行っている。行きつけの美容室に出掛ける利用者もあり、馴染みの関係継続の支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	関係性は理解できている。1人1人の性格を考慮し作業の時などはスタッフが間に入り新たな関わりが持てるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用終了後も気軽に話せる関係を現時点から作っている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	会話の中からその方の生活スタイルを見つけたり家族への確認を通して出来るだけ本人の希望に沿うように検討している。	利用者の発した言葉を「声リスト」に記録し、カンファレンスの際に再度確認し合っている。発語困難な利用者に対しては、表情や仕草により思いを把握している。職員は、音楽に対する反応が利用者毎に様々であることを理解し把握しており、一人ひとりに合わせ意向に沿うよう配慮し、支援に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	関係者や家族からの情報で把握できるよう努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	朝の起床時など本人の希望に添えるようにしている。健康状態についても毎朝のバイタル確認で変化があれば受診など迅速に対応するようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	家族や関係者からの情報はもとよりスタッフ間でもカンファレンスを行い、ただ計画書に反映できるようにしている。	事前に、本人・家族へアンケートを行い、それぞれの思いを把握している。サービス担当者会議を経て作成した計画は、3ヶ月毎に担当者がケアプラン評価表に記録し、モニタリングを実施している。前回の気付きであった計画変更時の同意は、改善し実施済である。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子、変化や気付き等は記録している		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	その方に応じた対応をサービスという観点ではなく、柔軟に支援することが出来ている。		

グループホームめぐみ荘(めぐみ荘・めぐみ荘2共通)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源については把握しているが活用できていない。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診については従来のかかりつけ医を尊重し定期受診など通院支援も行っている。	基本は入所前からのかかりつけ医を継続受診している他、協力医の往診もある。この他職員に看護師2名を配置している。職員が通院支援を行った際は、受診ノートに記載し、職員間で情報を共有している。顔写真付きの救急時ファイルを備えており、夜間、緊急時の体制を整備している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	都度、行えている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	NSWとの意見交換、情報提供を行い入院中でも情報の把握に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	説明は行っているが、実際はその時になって再度説明や同意を行っている。その方にあつた支援体制を各関係機関や家族と相談し行っている。	この2年間で3件の事例がある。「看取りの指針」を明文化し、契約時に家族へ説明している。その後状態の変化に伴って、その都度話し合い、同意書を得ている。職員は看取りについての研修を定期的に受けている。医師、職員、家族が一体となり、看取り支援に取り組んでいる。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変については看護師と連絡連携支援が出来ている。応急処置の仕方について消防士や救命救急士を招き勉強会を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を日常的に防火管理及び消火、避難訓練等を実施することにより、全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。また、火災等を未然に防ぐための対策をしている。	火災に関しては毎月行っているが、他の災害についてマニュアルはあるもののは訓練は実施出来ていない。	火災避難訓練を毎月、内1回は夜間想定で行っている。内年2回は、消防署の立会いである。消防団員が近隣住民の参加を促しており、地域の協力体制を構築しており、緊急連絡網や非常持出品、防災グッズも整備している。ただし、自然災害時の避難訓練はこれからである。	火災訓練は実施しているが、自然災害の訓練が未実施であるため、水害、地震等の自然災害を想定した訓練の実施が望まれる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉かけについて、声のトーンやゆっくり話すことに心掛けている。記録等の個人情報への配慮を行っている。	職員は利用者を「さん」付けで呼び、排泄誘導時も羞恥心に配慮し、声掛けしている。前回、課題となったトイレドアの修理や脱衣所のカーテンの位置変更を迅速に行い、プライバシーが確保できるよう改善している。個人情報については、写真掲載を含めた同意書を取り交わしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	選択肢をよういして出来るだけ発言を促すように努力している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	出来るだけその方のペースを大事にし配慮しながらケアを行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	洋服や整髪など心掛けている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	時々、食べたい物をきいて献立に反映させている。準備や後片付け等一緒に行っている。	利用者の食べたいものを献立に反映しており、地元の食材を活かした郷土料理を提供することもある。おせちは事業所内で作る他、特定の店の好きなメニューがある利用者に合わせることもある。回転寿司を食べに出掛けたり、焼き芋を作ったりと、食事を楽しめるよう支援している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事に関しては適量を提供できている。水分も年中アクエリアスを準備し常に飲めるようにしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	実施できている。		

グループホームめぐみ荘(めぐみ荘・めぐみ荘2共通)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	その方のペースを把握し事前誘導を行ったりその方に応じた物品の提供や提案をしている	排泄チェック表を利用して、一人ひとりのパターンを把握している。リハビリパンツを使用している利用者も昼間はできるだけトイレへ誘導する方針である。トイレの場所が把握できない利用者のために、床にカラーテープで順路を示した結果、改善された事例がある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	牛乳や乳製品などを活用したり、水分を多めに提供したり、出来るだけ下剤に頼らないようにしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	いつでも対応できるように体制を整えている。声かけも行っている。	1階は、個浴、2階は、大浴場となっており、利用者の希望に沿って支援している。2階の大浴場の前には、仕切りを新たに設け、更衣スペースを広げるよう取り組んでいる。入浴時は、利用者1対1となる良い機会であり、職員は会話を引き出すよう工夫している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	居室には自分の空間を意識できるようにご家族に本人の品物を持ってきてもらうようお願いしている。フロアでもソファーでお昼寝出来るよう環境を提供している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個別に管理し、薬の内容などはスタッフ間で情報交換しながら実施出来ている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物を畳んだり、生活の中での役割から、壁面や飾り作り、裁縫、布切りなど一緒に行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	お買物やドライブ等支援できている。要望がなくてもドライブなどで気分転換や季節を感じる事が出来ている。	日頃から、病院受診の帰りに買い物に寄ったり、花の季節には桜や菖蒲見学に出掛けている。気候のよい時期は1階のテラスでお菓子を食べてたり、事業所の周辺を散歩している。ただし、日常的な外出は歩行可能な利用者が多く、全利用者の十分な外出を支援しているとは言えない状況である。	利用者の状態や介護度により、外出の方法を工夫し、できるだけ多く戸外の空気に触れる機会を設ける取組みが望まれる。

グループホームめぐみ荘(めぐみ荘・めぐみ荘2共通)

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族の理解も必要な事なので、現状では管理している場面が多い。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話はいつでも使えるようにしている。また手紙についても試みている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	日の光などできるだけ自然を取り入れる環境作りを支援している。共有の場なので空調も最低限に合わせ個人的に衣服で対応するようにしている。1人1人のスペースを広く取っている。	広いスペースのリビングには、テーブルセットやソファを配し、利用者は、思い思いの場所で寛いでいる。大きな窓からは、竹林や海が見渡せ、自然を身近に感じることができる環境である。ベランダや前庭もあり、利用者が運動や食事を楽しめるスペースとなっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホームの作り上居室のドアを開けるとフロアが見えることもあり1人になりたい時は自室に行かれることが多い。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際や面会時に家族へお願いし出来るだけ馴染みに物をおいてもらっている。カレンダーや写真など自分の部屋という意識を持ってもらえるよう支援している。	居室は、窓から竹林の緑が見える落ち着いた空間である。居室への家具の持ち込みは、自由となっており、整理筆筒は好みのものを使っている。換気やエアコンの温度管理は職員が行い、快適な環境を保っている。家族の写真を飾り、利用者にとって心安らぐ居室となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	通路には物を置かない等、動線を意識した工夫は行っている。また補助具についても出来るだけ小ぶりの本人も遠慮なく使える物を家族と相談しながら導入してもらっている。		